岩本川創遊会

調査団体名　:　岩本川創遊会
設立年　:　2017 年
団体URL　:　無し
活動拠点　:　豊田市岩本川周辺（扶桑、百々）
取材日　:　2018年12月14日

団体代表者名　:　会長　小野内康伊
対応してくれた人の名前　:　小野内康伊
調査員　:　近藤朗、瀬川貴之
レポート作成者　:　瀬川貴之

活動内容

豊田市管轄の岩本川の下流域、矢作川と合流する地点までの間で、河川を挟んだ扶桑、百々地域の人々により河川の維持管理（草刈り）、及び豊田市と共に川づくりを行っている。市民の手づくりによる「小さな自然再生」という手法を取り入れながら、地域固有の「ふるさとの川づくり」を目指す。

キャッチフレーズ

川は僕らの楽しい遊び場

会のモットー（何を大切にしているか）

楽しい場として、考えて遊べる場として関わってもらうよう心掛けている。
「～しなければいけない」と義務になると楽しくなく続かない。
「いい加減に、良い加減に」やっていけるようにしている。
創遊会は「そうゆうんかい」。それぐらいの脱力感でやっていけるとよい。

岩本川創遊会の小野内さん

設立から現在に至るまで変化したこと

始まりは豊田市矢作川研究所主導による、河川浚渫後の地域住民向けのワークショップ（2015年）。そこで市民が描いた岩本川の「未来希望図」を基に、2016年から実際に市民が川づくりを行う「川づくり体験会」などを経て、始まりから3年目の2017年3月に岩本川両岸の扶桑地区・百々地区合わせた地域住民で岩本川創遊会設立。
その後、ワークショップを受けて豊田市による川に下りる階段の設置、地元小学校の課外授業の対応などから、普段から岩本川で遊ぶ子供が見られるようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市矢作川研究所、一般社団法人ClearWaterProject

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、地域資源の活用など）

地域の人の活動への巻き込み　（岩本川探検隊、川づくり体験会など）
豊田市との意見・要望調整
岩本川の草刈、小さな自然再生手法を使った川づくり（手づくり魚道プール、手づくりバーブで淵づくりなど）
平井小学校課外授業でのフィールド利用の支援

現在直面している課題

最初の立ち上がり期間の3年を経て、最初は勢いで進んだが、この後の3年をどのような方向性で進めるのか。

今後やってみたいこと

・百々地区にある新興団地「百々の杜」に住む人に岩本川創遊会に入ってもらうこと
・矢作川の水辺愛護会の次期メンバーを育て輩出する
・川、生き物の専門家の意見を受けて河川改善を行い、もっと生き物を増やせるような取り組みを進める

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

公の場をいじる活動のため、河川整備/生活面（ハード）役割としての市の窓口とは別に、それ以外のものづくり/レクリエーション/精神的（ソフト面）の相談窓口が行政に必要。（現在は矢作川研究所がその役目を担っている）。今後その体制が続くよう何かしらの担保（書面、組織・係等）が必要だと考えている。
すでに現状は満たされているが、市に「自由な発想で一緒に考えていこう」と言ってもらえているから、川づくりも自由に出来ている。そういう行政からの持続的な担保が必要。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞なぜ会長を引き受けたのか？
＜答え＞（小野内さんは）当時、自治区の役員（環境美化）をやっていて、また目の前の岩本川を何とかしたいとは思っていた。一方で豊田市矢作川研究所から、古巣水辺公園愛護会の村山さん（区長）に、ふるさとの川づくり企画の主体となる地域の人で誰か良い人がいないかと打診していて、小野内さんが紹介されていた。扶桑と百々地区の境目でもあり、色々しがらみになる部分とは別に、自由に出来る場であればということで引き受けた。
小野内さん曰く、このプロジェクトが始まったタイミングは奇跡的だった。たまたま呼びかけた矢作川研究所の所長が扶桑町自治区の早川匡さんであったことの意義は大きい。そこから少しだけ世代交代が進むことになったと思う。

その他、伝えたいこと

・世代交代に関し。
長いことやっていると、そこでやってきた人が、凝り固まってくる。
外の人が入って、考え/思考を広げてあげるのは非常に役立つ。地域の人で同じメンバーでやっていると色々なしがらみ、考えの固定化により「やらなければいけない」義務感ばかりになる。そうすると皆疲れ、新しい人も入ってこず、縮小していく。
外部の人に入ってもらって、言葉を代弁してもらう、普段話さないことを話す場を作ってもらう、川や生き物等本当に好きなことを持っている人に教えてもらう、といった場を用意すれば、引っ張られて呼ばれたからその場に来ている、といった人も新しい考えを持ち、楽しさを感じて新しいこともやっていってもらえる。（行政がこれをやってほしい、という話になると「なんだそれ」「めんどくさいな」となる。）
世代交代時に、先輩たちのわくわくは引き継げない。次の世代の交代には、次のわくわくを見つけろ、とその場だけ渡し、潔く引く。自然にたずさわりたいとは思っている人は他にもいるが、手あかにまみれた義務は若い世代は欲しくないのでは。

浚渫前（左）と取材時（右）の岩本川。浚渫前は土砂が堆積し川底も上がり、植物も繁茂していた。

取材後、岩本川を訪れて　～　(取材者)近藤の感動！

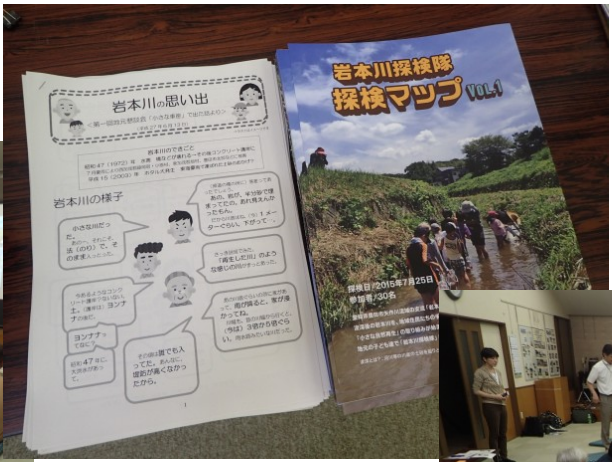
小野内さんは、小さい頃よりこの地で育ち、最も身近な川が岩本川であったという。 47災(1972年 昭和47年7月豪雨。現在の豊田市域で激甚な被害)での被災・復旧後は、ほぼほったらかしの状態だったとのことで、この河川が豊田市内でも扶桑地区と百々地区の境界を流れる小河川ということもあり、地域としてもそれほど目を向けられなかったらしい。
平成に入ってからは「多自然型川づくり」の概念が導入され、愛知県が扶桑地区で自然石による水制工群を整備し(1991年)「古鼡水辺公園」として親しまれ、愛護会も発足、その下流の貯木場公園がある百々地区でも水辺愛護会が立ち上がった。その間にあるのが岩本川であり、古鼡水制工から約四半世紀を経た後、市民自らによる「小さな自然再生」、そしてふるさとの川づくりが施されたことは、とても感慨深い。その主体となっている創遊会代表の小野内さんは、先輩格である二つの愛護会より当然ながら少し若い現役世代となる。

小野内さんが岩本川の良さとしてあげていたのが、その小ささ。自分たちで何とかなる(遊び場にできる)のではないかというスケール感と身近な存在であるということ。さらにほったらかしにされていたから、誰の手垢もついていないことを挙げられた。取材後その現場に赴くと、まさにわくわくするような小川の水辺空間が目に入ってきた。素敵！

まだまだ未完成だと思われるし、護岸も(恐らく)以前からのコンクリートブロックの立護岸が立ちはだかっているのであるが、川の中と水際、水辺空間が何とも自然で美しい。どうやって人の手を施したのだろう？という感じ。よく見ると石が配置されていて水制っぽく、あるいは堰みたいになっていたり、それがあまり目立たないのは、人力で川づくりができる範囲のスケールだからか、また作ってから壊れたり流されているかもしれないね。水辺の洲のつきかたも自然な感じで、まだ変化していくのかもしれない。水辺までは数メートルの護岸が阻んでいるが、時々階段が設置されており、子どもたちが知らないうちに川に堰をつくってしまうと聞いていたので、ここを好きなときに降りていくのでしょうね。ワクワク。

小野内さんが、ここを遊び場に、と言われていたことがよくわかる。水辺は変化していくし、草も生えるでしょう。ここでは維持管理が重要な水辺空間整備になるのですが、メンテナンスと思わず、探検しながらの自分たちの遊び場づくりと思えば、わくわくするはず。四半世紀の間、様々な工法を用いて「多自然川づくり」を試行錯誤してきたのであるが、これには負けたな。同時に川づくりにおいては水辺整備が最も重要であることを再認識させてくれた現場でもある。

写真



最初は住民懇談会にて、岩本川での過去の想いをお聞きしたり、浚渫後の岩本川をどうしていきたいか、「未来希望図」(次ページ参照)を作っていきました。岩本川創遊会発足の元にもなっています。

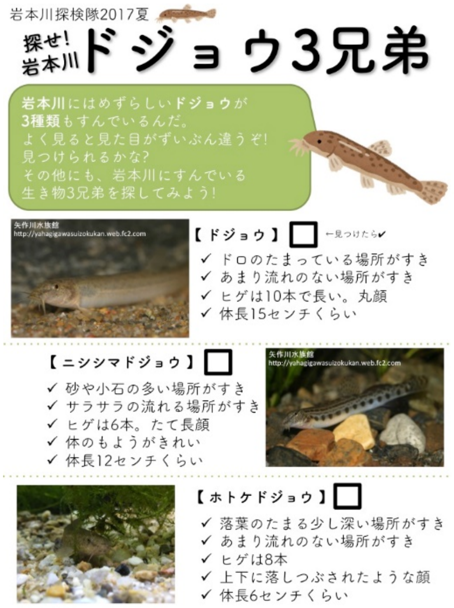
写真

ワークショップでの意見のまとめ

住民懇談会で出来た岩本川「未来希望図」（上）と、それを元に作った「未来希望図」（整備イメージ）（下）

整備イメージ案

写真



岩本川には2016年の岩本川探検隊で珍しいホトケドジョウが生息していることがわかったため、岩本川探検隊2017では 「ドジョウ3兄弟を探せ」というテーマで、地元の親子に岩本川の魅力を感じてもらえるイベントを実施

岩本川創遊会メンバーにて川づくり中。「小さな自然再生」の概念・手法を取り入れ、日曜大工的に川をいじってしまいます。川の草刈も創遊会を中心にやっています。

左の方に見える階段も、住民懇談会要望でついたものです。

イベント時だと泳ぐ子たちまで出てきちゃいました。